

カフェーと文芸

——銀座（周辺）のロシア系カフェーを中心に——

岡崎 一

珈 琲 店

色やかなる情熱のカフェーは
不思議なる都市の光線の筋で
夜の紫の焰と深紅と虹を纏ひつつ
星や街燈の交叉のうちに散らばる

カフェーは華やける漂流人の天幕となり
匂はしき彷徨女の王宮となり
もろもろの孤獨なる情熱像を燃やし出して
衣裳ある髑髏の色繪を燈す

瓦斯や影繪の彩薫ある街巷から
男女の流星はほのかにカフェーにすべり入り
秘密の計画ある魔の鳥のやうに
青い肉體を卓や椅子に飾り立てる

夜の時計の廻轉につれて
客は臃ろげなる焰となり
酒の牧師も花の兇漢も
累累としてすれちがふ

カフェーは夜の都市の新らしい教會となつて
悶ゆる懺悔人を呼び入れもするが
化粧せる闇の貴婦人がするどい表情で
生きた心臓をとりにくる地獄にもなる

カフェーは夜街の彩られし天文臺で
情熱の深夜や四季や時刻表をうつし出し
多くの人情技師や散歩の魔女が
死や恋愛の現實文字を讀みにくる小建築である。
(中西悟堂『²³⁴東京市』[抒情詩社、大正11年]280-82)

本稿はカフェー（部分的に喫茶店・洋食店・パアも含む）と文芸との関わりを主題とするものの、カフェー関連文献を網羅するわけでは全くないし、その必要もない。また、紙幅の関係からカフェーの総論も意図しておらず、本題としては特定のカフェーに焦点を当てることになる。対象期間も、與謝野晶子が「おもしろき CAFE だに無き都にて友よ何をか語らんとする」（「灰色の日」『新聲』明治 42 年 11 月）と詠んだカフェー前史から、実質的なカフェー元年（明治 44 年）を経て、カフェーが全盛期（昭和 4・7 年頃）を迎えるものの、当局の取り締まりを受けて行き詰まりを迎え（昭和 9 年）、カフェー・喫茶店が激減した昭和 11 年（二・二六事件の年）までに限定する。対象地域も、“日本の都會生活の檜舞臺”、“日本中の人間の渴仰的”、“現代文化の象徴”、“日本の中心”としての“銀座時代”（安藤更生『銀座細見』[春陽堂、昭和 6 年]5-6）と特別視された銀座（周辺）に限定し、伝統的大歓楽地の浅草などは敢えて含めない。

引用文献は、原典、近代デジタルライブラリー（国立国会図書館）、個人全集などに拠ったが、註釈・コメントは最小限に止めた。引用に際しては、旧字体（旧漢字・変体仮名・合字など）を原則として新字体に改めた。副題は、適宜省略した。ルビは、バラルビとした。補訂・補足は、[] で示した。漢数字は、差支えない限り、原則としてアラビア数字に改めた。〈ページ〉（頁、p. あるいは pp.）自体の記載は省き、数字のみで記載した。インターネット情報は言うに及ばず、辞典・事典・年表類からの引用については、既知事項であるため、出典を必ずしも明記しない。新聞記事の引用については、紙面の関係でレイアウトを已む無く変えた場合もある。戦前については（時代性を考慮して）元号を基本的に使用し、戦後については西暦を基本的に使用した。

銀座（当時は東京市京橋区）のカフェーやパアを描いた風俗小説には、広津和郎「女給」（『婦人公論』昭和 5 年 8 月－昭和 7 年 2 月）、永井荷風「つゆのあとさき」（『中央公論』昭和 6 年 10 月）、武田麟太郎「銀座八丁」（『東京朝日新聞』[夕刊]昭和 9 年 8 月 22 日－10 月 20 日）などがある。その中で、広津のベストセラー小説「女給」は日くつきのもので、（文士）吉水薫のモデルが菊池寛だったため、中央公論社（『婦人公論』発行所）と菊池との間で一時は告訴騒ぎにまで発展したものの和解が成立、後に大阪の帝国キネマ（帝キネ）によって映画化され、その主題歌「女給の唄」のレコード（西條八十 作詞、塩尻精八 作曲、羽衣歌子 歌唱[A 面]、二三吉 歌唱[B 面]）が、昭和 6 年 1 月にビクターから発売されヒットしている。

その冒頭に、女給の小夜子が銀座通りで擦れ違った中学生達から「ありゃネコか

い、トラかい」と言われる場面がある（『広津和郎全集』第5巻[中央公論社、1974年]7-8）。銀座にネコがいても全く不思議はないが、トラも存在していたということになれば、不審に思う人は多いはずである。因みに作者が自ら註記しているように、“ネコはカフェエ・黒猫、トラはカフェエ・タイガーの略”で、銀座ボーイの間ではこの略称で通用していたことを知れば、この不審は自ずから氷解するわけだが、実はタイガー（銀座5丁目西側[現在の7番地8号]）ばかりか、銀座通り筋向いの銀座5丁目東側（現在の8番地1号）には、曾てライオンまで存在していた。即ち、カフェー「ライオン」である。（その他、動物園張りに、イーグル・キリン・ピヨック・フォックスなどの動物名を冠したカフェーも銀座には存在し、そのことがアンドレイ・レイフェルトの漫画

でも諷刺されている。）

そのカフェー「タイガー」とカフェー「ライオン」は、実は西條八十「当世銀座節」（昭和3年）に次のように詠み込まれている。

東京銀座は
怖しどころ
虎と獅子とが酌に出る
みいちやん、はアちやん、上りだよ
注^ついだりキユールの薄情^{うすなさけ}
例^{れい}へ百夜^{ももよ}を来ればとて
チツブ^{リヤンコ}二十銭ちや惚れはせぬ。

（『西條八十全集』第8巻[国書刊行会、1992年]再版[2003年]10）

“虎”が「タイガー」、「獅子」が「ライオン」というわけだが、実は八十が「当世銀座節」を書いた時点では、両店の所在地は銀座5丁目ではなく尾張町1丁目だった（銀座5-8丁目の成立は昭和5年）。なお、“みいちやん”・“はアちやん”は女給の愛称、“リキユール”は同じく西條八十「東京行進曲」（昭和4年）でお馴染み、“百夜”は深草少将の小野小町邸への百夜通いで有名、“チツブ”は当時の女給の生活の糧。さすがに流行に敏感な八十ならではの手際だが、今後の行論にも関わるので、ここでカフェーについての定義と実態を予め見ておくことにする。

第1章 カフェーの定義と実態

先ず幾つかの参考例を以下に引用する。

●木下杢太郎「博士と悪魔と」（『詩歌』大正2年3月；『木下杢太郎詩集』[第一書房、昭和5年]）

博 士

[中略]あちらでも酒肆^{ばあ}

いやこちらでも、またあすこでも茶肆^{かふえ}——

（『木下杢太郎全集』第1巻[岩波書店、1950年]282）

●大庭柯公「カフェー（下）」『ペンの踊』（大阪屋号書店、大正10年）

私は敢てバーとカフェーとを混同しようと思ふものではない、が日本化せられた此二つのものは、それ自身混同してゐるのだ。イヤ二つ処ではない、バーとカフェーとレストランの三つが巴のやうに混一されてゐて、何の不思議もない有様である。西洋ではB、C、R此の三国の境界は甚だ明確で、カフェーとバーとは飲むことを本則とし、レストランは食ふことを本位とする。そして前二者の区別は、バーが強いやら甘いやらの酒を主とするに対して、カフェーは珈琲茶、麦酒および強い酒を飲ませる処と相場が定つてゐる。(11)

●広津和郎『年月のあしおと』（講談社、1963年）

この間二十代のタクシーの運転手君に、「僕等はカッフェというものがどんなものだから解らないのですが、どんなものだったのですか」と訊かれて驚いたことがある。そんなにも早く時は変遷するものなのか。「そうだね、今のキャバレーやナイトクラブの前身見たやうなものかね」と私は答えて置いた。

併しキャバレーやナイトクラブの前身のような大仕掛けのカッフェがむやみに出現したのは、昭和年代に入ってからで、当時のカッフェは銀座の一、二の例外を除けば、一品洋食屋の延長のような小さなものであった。それでいて今の喫茶店とは違い、サーヴィスの女たちは、客からのチップで生活しているのである。（『広津和郎全集』第12巻[中央公論社、1974年]214）

●小松崎 茂（画）・平野威馬雄（文）『懐かしの銀座・浅草』（毎日新聞社、1977年）

ビヤホールが名を変えたカフェーという名称は、本来なら、今日の喫茶店にあたるわけなのだが、日本で発生したカフェーの性格は純然たるバーであった。だれもそこへ行ってコーヒーだけを飲んで、帰るわけではなかった。そんなケチなことはダメだった。長い袂をひるがえし、白いエプロンをかけた美しい女給さんたちが、サービスをするのだから、まさか、コーヒー一杯というわけにはいかない。どうしてもビールか、カクテルかウイスキーということになる。コーヒーだけなら、町中にころがっているミルクホールか、カフェー・パウリスタへ行けばよかった。(208)

●平野威馬雄『銀座物語——街角のうた——』（日本コンサルタント・グループ、1983年）

当時、カフェー的なものには、はじめから三種あり、パウリスタのように、コーヒー、紅茶、カレーライスなど酒類ぬきの、のみものや菓子だけをひさぐ店と、白いエプロンに長いもとをひるがえした美しい女給さんのサービスをうけながら、ビールやカクテル、ウィスキーをたのしむというバー形式のもの、それから、純然たるミルクホール…… (76)

●初田亨『カフェーと喫茶店——モダン都市のたまり場——』INAX ALBUM 18 (INAX, 1993 年)

カフェーはフランス語で [café] と書く。コーヒー店の意味をもつ用語で、日本の喫茶店に通じるが、日本で使われるカフェーと喫茶店は、必ずしも同じ意味をもっていない。日本では、カフェーは女給をおいて、洋食や、洋酒およびビールなどをサービスする飲食店の意味に用いられてきた。同じような店に「バー」「サロン」といった名称をもつ飲食店もあるが、これらの営業内容が明確に区別されていたわけではなく、混同して用いられていた。一方喫茶店は、時にアルコールのサービスもするが、椅子やテーブルを備えた空間とともに、コーヒー、紅茶、ジュースや、パン、ケーキなどの軽い飲食物を提供する店をさす用語に用いられてきた。カフェーに女給はつきものであったが、喫茶店では女給が店の中心的な役割を果たしてはいない。つまり、女給がいてサービスをし、アルコールを出すところがカフェーで、アルコールを中心としない所が喫茶店として認識されてきたのである。(5)

昭和 8 年(1933)1 月には警視庁によって「特殊飲食店営業取締規則」が定められている[中略]。ここで言う特殊飲食店とは、洋風(イス、テーブル)の設備をもった店で、婦女が客席で接待する料理屋、飲食店のことで、普通飲食店との違いは、女給が接待をするかしないかという点にあった。[中略]当時の喫茶店には、特殊飲食店のものと普通飲食店の 2 種類の営業内容をもつものがあったことがわかる。これらの内容から判断すれば、カフェーの多くが特殊飲食店に入り、喫茶店の多くが普通飲食店に入ると考えてよいだろう。特殊飲食店と普通飲食店に分けて統計をとり始めた翌昭和 9 年(1934)と 14 年(1939)、15 年(1940)こそ前年よりいくらか減っているものの、特殊飲食店と普通飲食店を合計した喫茶店の数で比べると、喫茶店はその後も増え続けており、昭和 13 年(1938)には 3307 店を記録している。この数は、関東大震災の前年である大正 11 年(1922)の 100 倍以上にもなる。

昭和 8 年以前の特殊飲食店と普通飲食店の喫茶店の数は不明だが、昭和 8 年以降でみれば、特殊飲食店の喫茶店の数が減っているのに対して、普通飲食店の喫茶店の数が増えていることもわかる。昭和 8 年では特殊飲食店の喫茶店の数が 1701 に対して、普通飲食店の喫茶店が 900 と、特殊飲食店の喫茶店の方が

約1.9倍と多かったのに対して、昭和15年では特殊飲食店の喫茶店が1129に対して、普通飲食店の喫茶店が1738と、逆に普通飲食店の喫茶店の方が約1.54倍と多くなっている。それぞれの数値を「カフェー」と「喫茶店」と読みかえれば、昭和8年以降も喫茶店は増え続けていたのに対して、カフェーの方は減る傾向にあったことがわかる。(10)

先の特殊飲食店と普通飲食店の違いを併せて考えれば、女給がいてアルコールと食事を中心にサービスしていたのがカフェーで、アルコールではなく、コーヒー、牛乳、菓子、しる粉、そして食事などを女性のサービスなく提供していたのが喫茶店といえよう。なお昭和8年(1933)に発行された、昭和6年(1931)の統計からカフェーと喫茶店の実態をみてきたが、同じような傾向は昭和2年(1927)調査(本の発行は4年)の『東京市商工名鑑』や13年(1938)の『東京商工名簿』でも窺える。(31)

昭和の初めには、喫茶店は友達と語らう場、休むことのできる場、大衆的な社交場として利用されていたのである。昭和初期は、カフェーが都市の中に歓楽地として楽しい場をつくりだしていった一方で、喫茶店は気軽に訪れることのできる都市の中の“たまり場”として認識されていったのである。カフェーと喫茶店は、大正時代の初め頃から別々な道を歩みはじめ、関東大震災後にはその違いを明確なものにしているが、ともに都市生活に欠くことのできない場へ成長している。(40)

これで見ると、喫茶店(飲みもの中心)、カフェー(レストラン兼用で飲食・酒類中心、女給が特色)、バー(酒類中心)という3区分ができるようである。

第2章 カフェーの起源と変遷

本稿は別に銀座カフェー史を描くつもりではないが、カフェーの起源と変遷について最小限の記述をしておくことは必要であろう。そこで2つの参考例を以下に引用する。

●中央職業紹介事務局(編)『東京大阪両市に於ける職業婦人調査 女給』(中央職業紹介事務局、大正15年)

始めてカフェーの出来たのは明治四十四年に東京市京橋区銀座通りに東京美術学校出身の洋画家松山省三氏がプランタンと云ふカフェーを開業したに創まると云ふことである。さうして間もなくパウリスタ、ライオン、ブラジル等のカフェーが開店したのであるが当時の市民の大部分はカフェーの何たるかを知

らなかったのでプランタンなどでは最初の間は出入の顧客も特定されてみて洋画家や著述家、思想家とでも云ふやうな所謂新しい人達の集所の様なもので、主としてコーヒーを喫し、ウキスキーを呷って談り合つて居つたものである。丁度農村の青年達の寄合場所である髪床やの役目をつとめてみたのであつた。

それが此等の人達の繪となり小説となつて漸次一般に紹介され理解を得て、やれウーロン茶の香が何うの、カステラの感触が彼うの、五色の酒は何うの、カフェー情調とは非常な勢を以てカフェーの流行となり、其設備等は他の飲食店に迄影響したのであつた、それもこゝ五六年此方のことで関東大震災を以て一新紀元を劃したのである、[中略]汁粉屋までが、一躍椅子、テーブルにニツケル製の丸盆と変り、東髪の娘さんが白いエプロン姿で立働く状態となつたことは、行燈がランプとなりガス、電燈と進歩したと変りはない。(164-65)

●東京都中央区役所（編）『中央区史』下巻（東京都中央区役所、1958年）

大正初年には、第一次大戦が起り経済的に漁夫の利を占めた日本は空前の好景気にあおられた。市内の繁華街が好況に刺戟され、歓楽気分を反映した享楽街としての性格を濃化せしめる事となつた。大衆のフトコロが予想外に恵まれると、彼等は洋風・高級を標榜し、高尚とスマートをモットーとする銀座に集まり、しかも誰れ彼れの区別なく一切平等の歓待をうけたことは、やがて銀座の高級性を破壊し、高尚を無視するようになったものといわねばならない。少くもこれがために、銀座が大衆性を帯びたことは争えない事実である。[中略]

この高級性が失われ、代つて銀座がその全貌として大衆化したことは、その一面において銀座を著しく繁昌させ、しかも大歓楽境の形成を促進させたことは何人も否定しえない事実である。そして大歓楽境形成の渦中にあつたのがカフェーである。大正好況時代の市民はとにかく豪奢に走り、その結果として、いたずらに末梢神経の発達をうながし、断然食味的な欲求を捨てて、感覚的に、猟奇的にきつい刺戟を欲する以外、何ものの欲求もなくなった。勢い享楽気分がカフェー興隆に拍車をかけ、しかもカフェーが食事をする場所であるよりも、むしろ女給のサービスを中心とする享楽の場であることに、大衆が期せずして共鳴したのである。後年におけるカフェーの流行にはこうした蓋然性がすでにこの頃めばえていたのである。(985-86)

この後、カフェーは全盛期（昭和4-7年頃）を迎える。即ち、由利貞三が『新東京歌集』（白帝書房、昭和5年）で言う「かふえい文化」（184）、松崎天民が『東京食べある記』（誠文堂、昭和6年）で言う「カフェー時代」（32）、村島帰之『銀座の王宮カフェー』（文化生活研究会、昭和4年）の改題が示す『カフェー時代』（アポロ社、昭和6年）である。ところが、昭和8年には内務省にカフェー駆逐方針を発表されて、

昭和9年には行き詰まりを迎え、昭和10年には世間の白眼視的評価を改めさせるべく「みどり会」（女給品位向上会）・「女給学校」が設立されるものの、昭和11年（二・二六事件の年）には銀座のカフェー・喫茶店が36軒にまで減少している。

第3章 ギンザのカフェーと文芸関係者

銀座のカフェーと文芸関係者の概論については、前記の安藤『銀座細見』が便利であろう。

獨歩に「号外」といふ短篇がある。あの酒場正宗ホールは、實は銀座の加六を描いたものだが、あの中へ出て来る人々、あれが元來の銀座の客である。銀座のカフェは文士がはじめたのだ。たしかに銀座のカフェはカフェリテレエルとして出発したのだ。従つて当初の客は文士と新聞記者が主だつた。カフェは奔放な思想と、清新な空氣を求めて止まなかつた明治末期の文人が創始し、支持したものだつた。岩野泡鳴、永井荷風、押川春浪、小山内薫、吉井勇、松山省三、中澤臨川、生田葵、平岡権八郎、岡田三郎助、尾竹紅吉、松崎天民等の名は日本カフェ史上に記憶さるべきである。

それは何となく垢ぬけのした、つゝまじやかな美を持つた、中産階級的な、自由主義的な世界だつた。そこで最も大切にされたのは會話で、その次は酒だつた。女給は、勿論女給は美しかつたが、それはほんとにつゝましく酒間を斡旋するだけだつた。恋も芽生え、涙もあつたけれど、それは美しく整理された、目立たぬ点景であつた。凡てが一定の趣味を持つてゐて、誰も無作法にそれを冒す者はなかつた。今のやうに彩つた空氣でなく、輝く空氣が流れてゐた。

ガス燦々たる日吉町[「プランタン」所在地]の宵、如何に生命と文學が論じられたことか。獅子叫ぶライオンの夜、ビールは青春の歌と共に溢れたのである。

柳、柳、瓦斯、柳、柳、瓦斯、柳、柳、あゝ縹々たる柳枝、雨と共に靡びき、吾妻下駄鏘然として金春新道[「きゆうぺる」所在地]に鳴つたのであつた。當時京童の戲詩に曰く、

銀座の細雨輕塵を濕す
電車チンチン柳色新なり
君に勧むライオン一杯の酒
東新橋を出づればカフェなからん。

この空氣は大正も十年を過ぐる頃から次第に俗化し出したが、大震災を境としては俄然一変した。客は一斉に銀座へ殺倒したのである。そして、災後のあの急拵へのバラクの安ツボさは何となく安會社員の氣持を安易にさせ、今までは自分等のよりつけない様な場所だと考へてゐたのが、一つ這入つてみようといふ氣を起させた。それから銀座の俗化がはじまつた、銀座のカフェは全くこ

れ等田舎者に占領されて、トンカツ屋、牛肉屋と化し去つたのである。意気も旨好もケシ飛んでしまった。彼等が求めるのは機智ある會話でもない。輝き揺めく空気でもない。實に、——第一に女、第二に女、第三に女、そして、酒？、酒はビールで澤山だ。腹が空いたら、象のやうな胃の腑はトンカツが一番さ。會話？ そんなものは中学校で習つたとでも云ふだらう。

だから、むかし乍らの室気や品格を維持しようといふカフェは一斉に凋落した。ブランタンは今日その設備から云つても、客から云つても二流以下に落ちてしまった。ライオンは白髪染の剥かゝつた老婆のやうだ。云ひ知れぬ混乱が銀座の上へ降りかゝつて來た。この形勢を看取したのがタイガーである。彼はこの客の趣好に適ふために先づ女を集めた。そして、女は極めて自由に客に接近した。厚化粧をした女が、熱い息を吹き乍ら客にしな垂れかゝることは、銀座ではタイガーが始めたのだ。酒と云へば素性も知れないベソをかけたやうなパアテンダアが注いでよこす。ビールはユニオンビール。それでも客はワンサと押し寄せたものだ。否、第一次銀座カフェの指導者なる永井荷風先生さへも毎晩こゝへ来ては脂下つてみたものである。

つゞいてクロネコ、ゴンドラ、エロとグロとの乱舞だ。毎日毎晩女ばかりを目当てにカフェ通ひするやうな二本棒に銀座は全く蹂躪されてしまったのだ。
(200-03)

この後、安藤は“千九百三十年代の銀座カフェにはどんな客があるか？ 一寸覗いてみようではないか。”(203)として個々の文士を取り上げる。その人名一覧は

永井荷風、吉井勇、村松正俊、辻潤、長岡義夫、廣津和郎、酒井真人、田島淳、室伏高信、松崎天民、瀬戸英一、高田保、近藤経一、西村酔香、中村武羅夫、山内義雄、岡田三郎、古川緑波、三上於菟吉、安藤盛、宮川曼魚など何時も変わらず銀座界限のカフェを歩るいてゐる連中である。(204)

といった具合だが、(文士以外の銀座常連客を含む)各論が面白いので、以下に適宜摘録する。

[永井荷風]

永井荷風老先生は、何しろブラン[ン]タンの草分け時代からお客で、今に変わらず銀座を歩き廻つてゐる。嘗てブランタン楼上で酔つた押川春浪に殴られた事件は当時知らぬ者もなかったが、近頃はそれも知つてゐる者は稀であらう。一時は偏奇館上に隠逸の生活を送つてゐたが、五十の聲を聞き出す頃から又ぞろ銀座へ現れて愛慾戦線に馬を進めてゐる。タイガアにお久ありし頃はきまつて表の梯子段の取付きのボックスに長身白皙の姿を見ぬ夜とはなかつた。そのお久が後に偏奇館の贅上に胡坐をかい、日本文学全集の印税二萬圓スツバリ渡してしまひな、とか何とか勢ひのいゝ啖呵を切つたとか。それはさて措き

この日本文学全集とタイガアが聯関してもう一度我が壮吉大人にひどく崇つたことがあつた。

[中略]

或る晩、辻潤は酔つてゐた。室伏高信も一緒だつた。二人がタイガアの二階へ上つて来た。荷風氏はいつもの通りお久をはじめ多くの美女給に取り巻かれて、例のボックスに納つてゐるところだつた。平生は好々爺然たる辻潤も、曲つたことは毛筋ほども我慢がならぬ、本場争ひなら誰でもやつて来いといふチヤキチヤキの江戸ツ子だ。彼のカンシヤク玉は俄然バク発してしまつた。イキナリ荷風子のテーブルへ行つて曰く、

「てめえ、何時社會主義者になつたんだ」

荷風子少々面喰つて

「イヤその話[荷風が山本實彦の改造社を共產主義系と決めつけて、その圓本初期時代の画期的な『現代日本文学全集』に『永井荷風集』を含めることを拒否する旨の声明を『時事新報』紙上に發表していたにもかかわらず、水面下では密かに何万といふ額の印税を受け取り、『永井荷風集』出版の許諾を与えていたこと]ならあとでプランタンへ行つてよく話ませう」とか何とか逃げを打つのを聞かばこそ、お久なぞが出て来てとり做さうとするのを一蹴して、散々タカを切つた揚句が、

[戸ツ]

「いつたてめえなんざあ江ツ子だなんてぬかすが、さうちやあるめえ、大方名古屋種だらう」

聞くならく、荷風先生の考は諱匡温、久一郎と称す。尾張の人なり。と。

愛給——変な言葉だが、愛妓でもなし、愛娼でもないから仮りにかう呼んで置かうか——の前で罵られた荷風小史一寸気の毒でもあるが、この出入りどう考へても荷風氏の方には無ささうだ。

お久事件以後、荷風氏はあまりタイガアへ現れなくなつたが、近頃はサロン春、ゴンドラあたりへ愛陣を張つてゐるらしい。(204-07)

[酒井真人]

お久の話にはどうしても一と役買つて出なければならないのは酒井真人である。お久そのかみライオンに現れて、色褪せた銘仙の着物か何かで、誰にも認められず、うら淋しげにセルヴィルしてゐた頃、これにひそかに思ひを寄せたのが、高輪中学校教諭酒井真人だつたのだから、お久も知己の恩に感じてもしゃわけだ。彼れ真人、酔へばバネ仕掛のおモチヤみたいに暴れ廻るくせに、事ひとたびお久の事になるとからイクチ無く、飴をおみやげに買つて来て、ひそか

に長岡義夫に頼んで渡したりなんかしたものだ。^[た]アメルといふ言葉がそれから一時友達の間流行した。文藝雑誌のゴシツプなどを見ると真人は酒客といふことになつてゐるが、名字ばかり酒に関係があつても、彼のアルコールに対する力は極めて微弱で、生ビールを二杯も飲むと直ぐに大きな聲でも出さうとい

ふ方だ。だから知らない人がみるとさも大酒を飲むやうに見えるのだ。彼は酒客といふよりも酔客と云つた方が正しい。

[中略]ところでこの酒井真人どうしたものか、お久には餘り芳しい成績を挙げなかつたらしい。彼だつて震災前にはウーロン茶で大いに艶聞を謳はれたものだが、不思議にお久とはウマが合はなかつたらしい。お久がライオンをやめてタイガアへ行くと、彼もタイガアの常連になつた。お久がクロネコへ行くと、彼もクロネコの常連になつた。[中略]

お久に連関しては、脚本家の瀬戸英一氏や、音楽家近藤柏次郎氏を思ひ出す。二人ともよくお久のところへ通つた。両氏とも此頃はあんまり銀座に姿を現さない。(207-09)

[広津和郎]

廣津和郎氏も銀座には縁の深い人である。氏の今の夫人〔旧姓〕松沢はま、大正12年に知り合っていた〕はたしかその昔ライオンに居たことのある人だと思ふ。地震前にはよく京橋向ふのキタニホンに通つた。其処の女給「西野さん」も廣津氏の情史中何頁かを占める一人である。廣津氏はカフェへ来ても酒を飲まない。嘗て氏はその小説「小さい自轉車」の中でその心境を書いたことがある。いまその一節を抄出する。

自分は[中略]新橋から銀座のカフェを、片つばしから歴訪して歩いてゐるのだつた。[中略]銀座の表通りのカフェは夜の十一時頃になると一斉に店を閉ぢてしまふが、裏通りには、十二時になつても一時になつても、店を開いてゐるカフェが何軒かある。自分はいつの間にか、さうしたカフェの店をしまふ時間をすっかり覚えてしまった。實際、さうしたカフェの時間表が自分の心に出来上つてしまつたと云つても、誇張ではない。

自分は一軒のカフェが閉めかゝると、他の店に行き、そのカフェが閉めかゝると又他の店に行く。さうして歩いてゐると、午前一時半か二時頃までは、何とか腰をかけてゐられる店があるものである。腰かけてぼんやりしてゐると、方々のテーブルの上の電燈がだんゝに消えて行く。ウエイトレスがそこらを片づけ始めて。テーブルの上に椅子をさかさに載せ始める。そして総てのテーブルの上に椅子がさかさに載り、自分の腰かけてゐるところの上以外の総ての電燈が消えてしまつた時分になつて、やつと立上る。

[中略]

廣津氏はカフェの苦勞人だ。この人にして「女給」の作あり。たしかに現代銀座に働く女給の全貌を描破してゐる。——別に「女給」が小説として、名篇だと云つてゐるのではない。——(209-11)

[菊池寛]

菊池寛は一時タイガアへよく来て、到頭例の小説「女給」事件などを惹き起したが、彼の遊び振りは全くあの「女給」を見れば澤山だ。などといふとまた

殴られるかも知れないが、ついでに「女給」の話を一寸書く。元来廣津氏はあの小説を書くに就いて、モデルはとし子を使ふつもりはなく、その頃朱雀に居、以前はライオンに居てお秋と名乗り、今はサロン春に〇〇と呼ばれて居る女を書くつもりだつたのらしいが、それが急にとし子の方を書くことになったのだと傳へられる。菊池寛は近頃毎晩サロン春に現れる。その一晚に使ふ金は五十金を下るまい。毎晩小つちやなハンチングを冠つて秋子、ナ、子等を相手にボックスへ納つて居る。彼の財布はベラ棒にでかい。(211-12)

[村松正俊]

村松正俊の銀座生活も長い。大方二十年になるだらう。フランスから帰つてからはダンスに熱心になつて餘り銀座へは現れなくなつた。彼はライオン党である。一時は一日に八遍も来たといふから随分な凝り方だ。彼の銀座情史もライオンを中心に拈がつて居る。[中略]

彼の銀座情史中のクライマックスはライオンの綾子とのそれだらう。綾子当時は角のナンバアワンで天勝好みの美貌は大いに銀ブラ連の血を湧かしたが、村松正俊もその騎士の一人で、或時は彼女と散歩をしながらも、その気持の遣る瀬なさに二人で圓タクに乗つて一日に六十圓も乗り廻したといふ。(212)

[室伏高信]

室伏高信もよくカフェを歩く。彼の本拠は一時はライオンだつたが、後タイガアへ遷つた。銀友連は彼を略称してパパといふ。批評社を経営して居た頃は、毎晩銀座で彼を中心にした饗宴が開かれた。近頃は大岡山あたりへ隠棲して餘り出て来ない。(212-13)

[長岡義夫]

長岡義夫は酒量は多くないが、類ひ稀なる愛酒家である。彼の最も行くのはタイガア、ライオンで、近頃はゴンドラへも行くらしい。彼は酒を飲み、女給と仲好しになるが、決して惚れない。(213)

[尾崎士郎]

尾崎士郎は餘り銀座は歩かない。彼の今の夫人清子さんはライオンで得たのだけれど、それは全くふとしたことなので、彼が時事新報へ「世紀の夜」を書いて居た時分、ふとライオンへ這入つて、其頃二代目の綾子を名乗つてみた清子さんを見て、断然好きになつてしまつたのである。それから毎晩彼はライオンへ現れて、それから一ヶ月程の後には既に恋の勝利者であつた。(213)

[原桂一郎]

故原首相の嗣子文名原桂一郎もよくライオンへ現れた。彼は酒を飲まない。

紅茶を飲むだけで六時間位頑張つて居るのだから偉ひものだ。(214)

[安田與四郎]

文士ではないが、経済雑誌「ダイヤモンド」安田與四郎氏はよくライオンへ来てウキスキイを飲んで居たが、近頃はサロン春へ現れて居る。「何故ライオンへ行かないんです？」と云ふと、「イヤ、あすこはパンヤになつたから。私は酒飲みで、パンヤに用はないのです」などと云つて居る。不知美人なき酒場と、美人あるパン屋と、氏は果して何れを選ぶやを。(214)

[スポーツマン]

銀座カフェの客には不思議にスポーツマンが眼立つ。ラグビー、柔道、相撲[、]野球等の選手が一つのグループをなして居る。これは古く押川春浪、阿武天風などの天狗連がプランタン辺りでメエトルを上げた餘波なのかも知れない。

明大先輩の加藤隆生、慶應の浅見、早稲田の山中、明治の倉田など大將株である。一方銀座カフェの治安(?)はこれら運動選手の實力によつて保たれて居ることは否み難い。實際銀座のカフェには下らない不良少年は少い。これはかゝるスポーツマンの横行に敵対し難いからであらう。その代り時にはそのスポーツマン自身が悪化して困る時などもあるが。(214-15)

[小唄幸兵衛]

このほか銀座のカフェには、これとは思ふやうな人々が居る。例へば近頃ラヂオに断然進出して居る小唄の師匠小唄幸兵衛の如きも大のカフェ通で、白頭を翳してタイガア、松月あたりを游戈して居る。幸兵衛が唄の常に舊套に墮せずして新色あるは故あるかなと思はれる。(216)

これで見ると、女給が銀座カフェー常連客（銀友連）の嗜好を左右した場合もあることは確かだが、それだけで常連客の嗜好を説明できるわけではない。今 ^{こん}和次郎（編集代表）『新版大東京案内』（中央公論社、昭和4年）に記されている通り、“酒に酔ふ為めに、苦境を脱れる為めに[、]一人で考へない為めに、友情を暖めるために”(154)もカフェーは必要であつた。また、アンケート回答集 ^{「昭和時代流行の象徴として観たる」}「自動車」と「活動寫眞」と「カフェー」の印象（『中央公論』大正7年9月）の中で久保田万太郎が記している通り、“人を待合せるためと、中途半端な時間をつぶすため”(「説苑」欄92)にもカフェーは必要であつた。また、西脇順三郎「Memory and Vision (3)」(『英語青年』1952年2月)・「丸善の思出」(『学燈』1969年1月)に見られるように、神田の古本屋や日本橋の丸善で買った本を、帰りがけに「パウリスタ」で余り甘くないコーヒーを飲みながら得意気に拵けて見るような学生にもカフェーは必要であつた(『西脇順三郎全集』第10巻[筑摩書房、1972年]第2版[1983年]19,624)。また、平塚らいてう等の雑誌『青鞥』が「プランタン」(創業期のマネージャーは、極めて興味深いことに、後に共産主義者となる近藤栄蔵だった)の広告を載せたよ

うに、婦人運動関係者にとってもカフェー（の広告収入）は必要であった。また、大杉栄の帰朝歓迎会（大正12年7月28日、伊藤野枝・秋田雨雀らが出席）や藤森成吉の会（大正14年6月20日、堺利彦・石川三四郎・白柳秀湖・秋田雨雀らが出席）が「パウリスタ」で開かれたり、第1次共産党事件（大正12年6月5日）での検挙直前、佐野学が日本を脱出してロシアへ入国した際に神楽坂方面のカフェーで尾行を見事に撒いたように、社会運動関係者にとってもカフェーは必要であった。つまり普選に象徴される大衆化時代の到来と共に、カフェーは誰にも開かれた歓楽境——“一つの遊離されたユートピア”（小林儀三郎『コンマーシャルガイド』[コンマーシャルガイド社、昭和5年]183）——になったわけである。

ここで一つの問題に遭遇する。例えば大カフェー通の荷風の場合、「タイガー」（荷風の表記では「タイガ」・「太牙」・「太訝」・「太訝楼」）偏愛は余りにも有名だが、昭和11年までの荷風日記に登場するカフェー類を統計的に見た場合）その他にも「オリムピツク」・「きゆうべる」・「萬茶亭^{ばんさ}」・「モナミ」・「ラインゴールド」などは偏愛していたと言える。しかし「コロパン」・「ゴンドラ」・「サロン春」・「プランタン」・「ライオン」などは、（愛好していたとは言え）偏愛していたとは言いがたい。まして、「エスキーモ」・「キリン」・「クロネコ」・「パウリスタ」・「バツカス」などは、むしろ好まなかった。“永井荷風とか小山内薫とかいようなハイカラな大人は”、“パウリスタ”“へは姿を見せなかった”と小島政二郎も「奥野信太郎」（『小説新潮』1966年3-6月）で記している（『なつかしい顔』[鶴書房、1967年]38）。この差は何に起因するのかと言えば、その答えは次の2つの参考例によって与えられるであろう。

●中央職業紹介事務局（編）『東京大阪両市に於ける職業婦人調査 女給』（既出）

顧客の種類を大體学生、勤人、商人の三つに分けると、カフェーも亦之等の三つの何れかの『向き』と云ふ様にも云はれることとなる。今二三の實情を例記してみると

緑に黄や白色光の眩い電燈の下では青年紳士がシヤンパンや cocktails の杯を挙げてゐる……中央の蓄音機臺からはフオックス Trot のダンシングミュージックが静かに響き初めた……青い絹の衝立を距て、ウエイトレスとお客が相擁してダンスの姿勢をとつた……。

蔭鬱な青電燈の淡い光り下ではピロート服の長髪青年が紅茶々碗の飲み残りを見つめて深い思ひに沈んでゐる……傍には黒塗りのピアノは重苦しい色を照り返へしてゐる……。

ラヂオや蓄音機の騒々しさを外に若い金釧の学生が女給と丸テーブルを囲んで囁いてゐる……傍では女給と烏打帽の学生が「都の西北」を唄つてゐる、其横では赤ら顔の中年男が熱燗をチビリ〜と女給を相手に管を捲いてゐる……。

と云ふ様に店の空氣が違ひ、此等全部を総括してカフェー情調と云はれてゐて、

此等の気分も夜の九時十時十一時と時の遡るに従つて次第に濃厚の度を加へて行くものと云はれてゐる。画家は繪に、文士は単行本や新聞雑誌と縦横の描寫に各人獨特の妙筆を振つてゐる。尚店に依つては女給全部が一樣にお客が一寸した甘いことを云はふものなら「妾光栄だわ」、とか云つた言葉を連発する、之れに反して何と云つても「ハイ」以外の言葉を一切用ひないで唯ニコ〜としてゐるものもある、客用の椅子には一切腰を掛けぬもの、ナフキンを必ず左の腕に掛けてゐるもの等多種多様な言語、動作は女給の服装と内部の施設と相俟つて其店の中に一つの統一された空氣を漂してゐる。

さうしてそれが又其店の空氣にピッタリと調和されてゐるやうである。

又お客の中に時々蒲田の人気女優が紅茶飲みに来ると云ふやうなことがあると、其の噂が次から次と傳はつて其の女優見たさに押しかける新規の客が雲集する、ために其店の人氣が際立つて引立つと同時に、情調気分は一夜の中に変つてしまつて、店の気分と云ふよりも、其お客たる女優を取巻いた情調と云つた方が當つてゐる結果となるのである。

又之れに反して人相の悪い、一見憎惡の感を起させる服装をした不良の徒が、いつも片隅のテーブルを占領して、紅茶一杯で二時間の餘も据り込み、出入の客を一々チロリ〜と眺めてみると云つた店は、いつとはなしに感じの悪い陰鬱な店と云ふことになつて次第〜に客足が遠ざかつて行く。

右の様にカフェー情調はお客の種類に依つて其過半の気分を左右されると同時に此客種が亦其店の盛衰に至大な原因をなしてゐる。(169-71)

●前田 一『續サラリーマン物語』（東洋經濟[新報]出版部、昭和3年）

しかし忘れてならぬことは、ライオンには自^{おのづか}らライオンの空氣があり、タイガーにはタイガーの色彩があることである。

虎とか、獅子とか、こんな猛獸狩をやつてゐるときの心持と、黒猫とか、ド^{おのづか}ラ犬とかいふ動物狩をやつてゐるときとは、自^{おのづか}ら気分の持ちやうにも変化

がなければならぬ。いやその變つた気分は、こちらよりも向ふの方で、ちやんと醗酵してくれるから、それに抵抗せぬだけの量見さへあればそれでよい。

斯くの如く、その各々に一つの特有なる、情調と、気分とを感得するのは、謂ふまでもなく、そのカフェーの施政方針の相違によるものであつて、客と、女給との触れ合ふ感触から醸成される一つのムードが、おのがじしすべてのカフェーを特徴づけて居るものである。

カフェー、クロネコが、不思議な湯呑、クロネコ焼を発売して、「招き猫」の寸法で、客を引き込まうとするに対し、カフェーパツカスが「酒の禮讃」を看板に、パツカスの歌を謡ひ出したところは、一寸思ひ付きであらう。

斯ふして、思ひ～の気分を、明るい、又は薄暗い、部屋一杯に漂はさうとする。

ビールの酔——日本酒の酔——カクテルの酔——酔心地はいろ～異つてゐる。自分の好きな酔心地になりたいのは人情、そこに所謂「フアン」が現はれ、「地廻り」が出没し、「定連」が出来るといふものである。

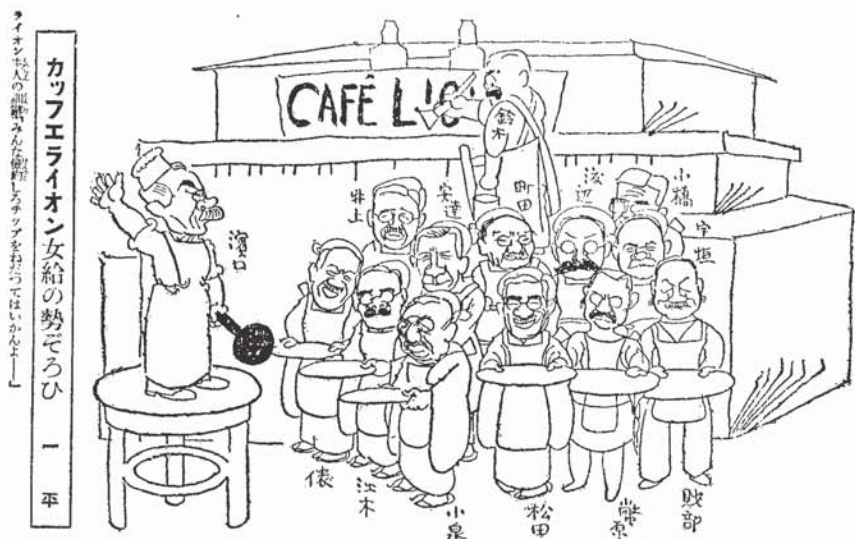
一
パツカス お前の 酒樽に
心配苦勞が ドンブラコ
飲め 飲め 飲め 飲め
世界が 廻る程
酒！ 酒！ 酒！

二
パツカス お前の 酒の香に
心身 すべてが ノンビリコ
飲め 飲め 飲め 飲め
世界の 笑ふ程
酒！ 酒！ 酒！

三
パツカス お前の 酒盃に
しんそこ 元気が リンリンコ
飲め 飲め 飲め 飲め
世界の 踊る程
酒！ 酒！ 酒！ (153-56)

つまりは各々のカフェーに“一つの特有なる、情調と、気分”があり、それは“そのカフェーの施政方針の相違によるもの”というわけだが、普通なら（経営方針）と言うべき処を（施政方針）と言っている処が興味深い。前記のように、日本におけるカフェーの起源は（「可否茶館」・「台湾喫茶店」のような前史を除けば）文芸喫茶店「プランタン」とするのが普通であるが、「日露戦争後、明治の時代が熟して来た時分、新聞の論調がフランスの政治運動が多くはカフェーに寄る青年の口から導火線を起すことが有意義であるとし、日本にも各方面が打ち融け合ふカフェーの必要があると唱導したのが、今日のカフェー時代の遠因である」（小林 182）という解釈もあり、この解釈に立てば（施政方針）という政治用語も似つかわしくなる。そしてカフェーと政治との密接な関係を見事に戯画化したのが岡本一平であり、（田

中義一政友会内閣の後継として〈浜口ライオン〉の綽名と緊縮政策で知られる浜口雄幸民政党内閣が昭和4年7月2日に成立した際に岡本が描いた「カフェエライオン女給の勢ぞろひ」



『東京朝日新聞』昭和4年7月3日【朝刊】3

は、ライオンに両義性を持たせた珍重すべき例と言える。

そして、この昭和4年——そもそも西條八十の銀座歌謡が流行した年、またカフェー基本文献の一つである村島崑之『^{東京}のカフェー』が出版された年、また政治的には政界疑獄が多く、共産党員の全国的検挙（四・一六事件）も生じた年——は、カフェーの最盛期に当たっていた。前記の今『新版大東京案内』には、次のような記述がある。

世間の日に増す不景気に反比例して、最近の市内外に於けるカフェー、バーの膨脹ぶりは實際驚くばかりである。こゝ僅か二年の間に、銀座にも浅草にも神田、にも新宿にも、目まぐるしい程な快速力でカフェーやバーが殖えて来て、カフェーは六千八百七十七軒、バーは千三百四十五軒といふ警視庁の統計（昭和四年八月現在）は今や正にカフェーの黄金時代を物語つてゐる。カフェーの洪水！ しかもそこに働いてゐる女給は、カフェー一萬三千八百四十九人、バー千七百十人を算へ、これらの大部分が客のチップを唯一の収入として街頭

に戦つてゐるのである。銀座だけでさへ、女給は千六百八十人もゐる。だから、たとへ千手千足の姿であつても、容易にこれらのカフェーを廻り切ることは出来ないし、まして女給の顔を一々覚えるなどは、思ひも寄らぬところである。
(153-54)

どのような人物（特に文芸関係者）がどのようなカフェーを好んだかの一端は前記の安藤『銀座細見』の記述からも窺えるし、池田弥三郎『銀座十二章』（朝日新聞社、1965年）の次の文章も参考になろう。

パウリスタの常連[福原信辰、宇野四郎、南部修太郎、井汲清治、小島政二郎、三宅周太郎、水木京太などの三田派]の顔ぶれをみると、久保田[万太郎]さん以外は、いわば文壇登場以前の文学青年であつて、もちろん、まさにスタートラインにつこうとしている人々ではあつたが、これをブランタンの常連に比べると、一段階も二段階も若いグループであつたことがわかる。

ブランタンは、常連を確保するために、維持会員を作つたが、その会員の中には、

黒田清輝・岡田三郎助・和田英作・森鷗外・押川春浪・岡木綺堂・永井荷風・正宗白鳥・小山内薫・島村抱月・木下杢太郎・北原白秋・谷崎潤一郎・市村羽左衛門・市川左団次・伊井蓉峰

など、そうそうたる名前がみえる。

要するに、カフェー・ブランタンとカフェー・パウリスタとは、自然と客を分け合う結果となつて、文壇画壇劇壇の、大家中家小家を銀座にひき寄せる働きをしたことになる。(221-22)

カフェー客の言わば〈棲み分け〉を検証することは極めて興味深く重要な作業だが、詳論することは本稿の容量を超えることになるので別稿に譲ることとし、また「ブランタン」・「パウリスタ」・「ライオン」・「タイガー」などの大物カフェーについても、種々の文献——武田勝彦・田中康子『銀座と文士たち』（明治書院、1991年）や長谷川泰三『日本で最初の喫茶店「ブラジル移民の父」がはじめて一カフェーパウリスタ物語』（文園社、2008年）など——である程度まで知られているので割愛し、本稿ではロシア系のカフェーに限定して検討する。

外国人居留地（築地）に隣接し流行（文明開化）の先端を行く国際色豊かな銀座には、ヨーロッパ——本稿の流れで言えばカフェー「ユーロツプ」——を始めとして、“ロシア、イタリア、フランス、アメリカ、オランダなどの名をカフェの下につけたものが出来”（水島爾保布『新東京繁昌記』[日本評論社、大正13年]32）ていた。正宗白鳥「銀座」散歩（『古東多万』昭和7年1月）によれば、“それは、外人が経営してゐる譯でもなく、また外国からの漫遊客を引き寄せるためでもなく、

外国語がよく分りもしない癖に外国語を有難がる現代日本の国民性を現してゐる。
 [中略] 銀座がますゝ欧米の植民地の市街らしくなる所以である”（『正宗白鳥全集』
 第27巻[福武書店、1985年]175-76）というわけである（ただし白鳥は“それを歎
 いてゐるのではな”く“事實を事實として見てゐるだけ”である）。擬似植民地とい
 う見方は、アンケート回答集『新時代流行の象徴として観たる「自動車」と「活動寫眞」と「カフェー」の印象』（既出）の中で柳澤健も示している（『中央公論』大正7年9月「説苑」欄70）し、
 辻潤も「どりんく・ごうらうんど」（大正14年3月）で示しており（『絶望の書』[萬
 里閣書房、昭和5年]188-89）、妥当な分析と言えよう。

それは兎も角も、国際色豊かな銀座のカフェーの中でも、革命後のロシア人の流
 転の人生——「とほり来て／かへり見にけり／路に立ち／ロシヤ女がひさ嚙ぐ花束」（由
 利 17）という短歌に代表される——を反映してもいるロシア系カフェーは特に注
 目に値する。これについては、銀座内外で、ロシア人経営のカフェー「日露」（九段
 下）・「モスコー」（仙台市）、ロシア人女給もいたカフェー「美人座」（銀座1丁目）・
 「ルナー」（銀座7丁目）・「アレキサンドリヤ」（浅草）、大正15年3月20日にビリ
 ニヤーク（ロシアの文豪）夫妻の歓迎会が開かれたカフェー「オザワ」（神楽坂）な
 ど、興味深いカフェーの存在を指摘できるが、文芸という主題と対象地域の関係か
 ら本稿では割愛し、以下の銀座（周辺）のカフェーに限定する。

第4章 ロシア系カフェーと文芸

●「ウオトカ屋」（芝区芝口河岸[現在の港区新橋1丁目4-5番地]）

「ウオトカ屋」は、文芸関係では、次のように秋田雨雀・永井荷風の日記に現れて
 いる。

[昭和8年5月27日] 午後七時からレインボー・グリルで前進座の招待会があ
 った。[中略] 八田[元夫]君と時岡のやっている「ウオトカ」に寄った。（尾崎宏
 次編『秋田雨雀日記』第2巻[未来社、1965年]341） ※「レインボー・グリ
 ル」は大阪ビル（麴町区内幸町）の地下にあった東京有数の洋食店。大阪ビル
 に文藝春秋社があったため、同社に出入りする文士を始めとして文壇・実業界
 のファンが多かった。前記「女給」問題の調停の際にも、広津和郎が文藝春秋
 社の菊池寛と面会する直前に「レインボー・グリル」で久米正雄や山本有三に
 出会っている。昭和6年4月下旬より、大阪ビルの拡張に伴い、その地階全部
 を使用することになり、拡張工事を完成させていた。（『本誌広告辞典』『食道楽』

露美人の浮氣から

深夜三國人が格闘

女は問題のウクライナ女将で

オデツサ主人は仲裁して負傷

有楽町の所屬山崎町に去年九月
頃から居座されて物好きに淫き男
からよく問題にされ舞臺でも一
度検査をされた事のあるカフエ。
ウクライナで三月午後十一時半頃
主人コロミエツ（オデツサ）と
主人コロミエツ（オデツサ）と
（この）兩人が折衝を飲みに来た
外人客 三名と車を雇ん
で居た。是の中一人はルブレ
ー（コ）フランス（コ）グレート（コ）
の三名が入り来り隣の車に腰を
掛ける。後で一人はグレート（コ）
の所ある女主人アダム（コ）は同
の傍に來て握手するやうに私語す
るやうに思ふ。後で午後十
二時頃、三名が
酔ひ痴れ れて戸外に出る

のを持ち兼ね、主人のコロミエツ
は、館に堪へ兼ね突如アダム（コ）
を散々に鞭打したので、アダム（コ）
は戸外に飛び出し、鞭打りの獨人
三名に救ひを求めたこの騒動を聞
き付け、奥で且つ同様のカフエ。
オデツサの経営者岡部（コ）一（コ）が
飛込んで仲裁する。獨人三名は
「何故なぞの出る位ではない」と岡
部を

散々に 鞭打し、岡部（コ）
は、各等々に金貨三圓の打撃を
受けた。後で、比谷から係員
が、強し、彼等、岡部（コ）を附近の折衝
に入れ、彼等、手錠を加へしめ、加害者
三名の行方を監視したが未だ行方
不明である

（『讀賣新聞』大正11年3月5日〔朝刊〕5）

「ウクライナ」は、文芸関係では、次のように永井荷風の日記に現れている。

[大正 10 年 9 月 24 日] 日比谷の横町に俄国人の営めるカツフエーウクライナ
といふ酒亭あり。平岡〔権八郎〕画伯と劇場聴歌の帰途、入りて憩ふ。歌劇一座
の俄国人男女数名来りて頻にウオトカ酒を飲む。画伯遠客を慰めむとて盛に三
鞭酒を抜いて盃を勧む。彼等其の好意を謝し、盃を挙げて一齋に故郷の歌を唱
ふ。言語の通ぜざるを憾む。（『断腸亭日記卷之五』；『荷風全集』第 19 卷〔岩波
書店、1964 年〕208-09）

- 「オデツサ」（麹町区有楽町 1 丁目 4 番地、後に元数寄屋町
2 丁目〔現在の銀座 5 丁目 4 番地 3 号〕に移転）

「オデツサ」は、次のように新聞記事に現れている。

「オデッサ」は、文芸関係では、次のように尾崎一雄・寺田寅彦・安藤更生の文章に現れている。

尾崎一雄『あの日この日』（講談社、1975年）上（七十七）

私が銀座のカフェーに出入りし始めたのは、やはり大正九年の頃で、「ライオン」や「タイガー」のほか「プランタン」「ホワイト・パーロット」などを覚えてゐる。「ロシア屋」といふのは知らぬが「オデッサ」といふロシア人一家の経営する店が日比谷の近くにあつて、京口や杉阪と共に、片上伸教授に連れて行かれたことがある。片上さんがロシア語をペラペラしゃべるのに驚いたが、これは驚く方がどうかしてゐたのだ。

ウオトカをこの時初めて飲んだ。

それから暫く経つたある日、校庭で杉阪など仲間と立話をしてゐるところへ、片上さんが通りかかった。私は「先生」と呼び留めて、放課後「オデッサ」へ連れていつてください、と言つた。

「ほう、あの店が気に入りましたか」

「ロシアへ行つたやうな気分です。今日は、これなんです」と、私は学生服の左ポケットを叩いた。

「え？」

「ブルジョアなんです」

「君が奢るつていふの？」

「はい」

片上さんは反りかへつて笑つた。餘ほど可笑しかつたらしい。私は、しまつた、と思ふと共に、顔に血がのぼつた。片上さんは、今日は都合が悪いから、この次まで預けて置く、と言つて、向うへ去つた。

神経質な杉阪は、私と一緒に赤面してゐた。私はときどき出てくる自分の軽佻浮薄性にうんざりした。そして多分、渋る杉阪を強引に鶴巻町のカフェーに連れ込んで、ビールか何か飲んだだらう。さういふとき、尚更さういふことをやつてしまふのだ。

私が片上教授に叩いて見せたポケットといふのは、外側のである。そこへ、十圓新札二十枚位を裸のまま入れてゐた。その日の午前中、私は日本橋の株式仲買店玉塚栄次郎商店へ出かけて小切手を受取り、橋を渡つたところにある第一銀行でそれを現金化したのである。信用取引で小利を得たわけだ。

そののち、片上さんに逢ふと、「尾崎君、今日はここはどうですか」と自分の左胸を叩いて見せるので、閉口した。「オデッサ」は、店の造りも店の人たちも、ロシアの小説中のもののやうに思はれてなかなか魅力があつたが、ポケットを叩いたりしたため気持が萎えて、二度と行かずひになつた。（『尾崎一雄全集』第13巻〔筑摩書房、1984年〕406-07）

寺田寅彦書簡

今日津田君と東京日々新聞社上の泰西名画展覧会といふのを見ましたが兎に角面白いものであります、[中略] 津田君に別れてから气象台へ行くのに少し早かったので日比谷の裏町を歩いて居るうちにカフェーオデツサといふのがある、妙なうちだと思つて這入つて見て一驚を吃した、此の顛末は拝眉の上に譲る(小宮豊隆宛て葉書[大正11年11月10日付け];『寺田寅彦全集』第26巻[岩波書店、1999年]423-24)

安藤更生「カフェ列伝」

オデツサは古い家である。もと山カン横丁にあつた。当時の尖端エロカフェだつた。今対鶴館へ越して来ても仲々やるらしい話である。(『銀座細見』140)

●「モスクワ」

「モスクワ」は、文芸関係では、次のように室生犀星の日記に現れている。

[昭和4年3月12日] 萩原をさそひ駅前の「閑雅なるビヤホール」にてビールを飲み、出来心にて銀座に出づ。山水楼にて夕食、後にモスクワ・カフェに至る。

[昭和4年3月15日] 夕飯後萩原来る。カフェ・モスクワに至る。

[昭和4年3月20日] 衣巻省三君をたづねる。萩原平木同道、酒出づ、後に萩原と衣巻君宅を出て銀座に至り、カフェ・モスクワにてビールをのみ、竹葉に夕食をとる。(『室生犀星全集』別巻1[新潮社、1966年;セット版、1976年]95-96)

犀星と萩原朔太郎との親交は知られている。大正15年11月下旬に朔太郎は東京府荏原郡馬込村平張1320番地(現在の東京都大田区南馬込3丁目23番地)に移住していたが、昭和3年11月中旬に犀星が近隣の大森谷中1077番地へ移住してきたため、田端時代に続いて、二人の往来は再び頻繁化していた。

●「モスクワ」

洋食店「モスクワ」は、文芸関係では、次のように秋田雨雀の日記に現れている。

[昭和4年3月9日] 午後十二時ごろ丸ビシの「造型」へ行き、二時から出席のことをことわって、すぐレストオラント・モスクワへ行く。[中略]

([河原崎]長十郎招待の会(ソヴェート芸術)。[中略])

[昭和4年6月16日] (夜、レストオラント・モスクワのレーフェルト君歓迎会へ。)(『秋田雨雀日記』第2巻146、153)

雨雀は“この年二月に進歩的な美術家の団体である「造型」と「アール」（日本プロレタリア美術家同盟）との合同問題の座長として毎回出席し”（秋田雨雀『雨雀自傳』[新評論社、1953年]156）ていた。“アンドレイ・レイフェルト（1898～1937）は今では忘れられた存在だが、ウラジオストクで日本語を学んだのち、二度にわたり来日（1925～27、28～32年）、日本文学・演劇研究のかたわら漫画家としても活躍したユニークな才人である（秋田雨雀、柳瀬正夢らと親交があった）。帰国後の35年に労作『現代日本語常用漢字辞典』を著すが、当時の日本研究者の例に洩れずスターリンの粛清の犠牲となった”（沼辺信一「レイフェルトの遺著に手が震える」[<http://numabe.exblog.jp/5176681/>])。補足すれば、レイフェルトは浮世絵を通じて日本に憧れを抱いていた。上記の日記に加えて、『秋田雨雀日記』に“[昭和4年1月2日] 神戸総領事館のレイフェルト君から小山内[薫]君の伝記、写真、舞台面がほしいといってきたので送ることにする”（第2巻139）、“[昭和4年4月16日] 神戸領事館にレーフェルト君を訪うと留守だった”（第2巻149）という関連記事もあるが、いずれもレイフェルト再来日の時期に関わるものである。更に、再来日中に「ロシア漫画家の『東京見物』」（『東京朝日新聞』[夕刊]昭和6年3月13日～4月30日）を発表しており、その中でカフエーも諷刺的に取り上げている（3月24～26日）。

●「モスコー」（銀座3丁目）

バア「モスコー」は、次のように新聞記事に現れている。

封印されたバーに

立て籠る悲壯な女給連

盛り場銀座の不況の現はれ

盛り場銀座二十月のバーモスコ
は本年七月から経営者が變り「正
子の室」となつたが、この方面の
非常時不況に襲はれて家賃は急
納、それに家主日本火災保険會社
の反対を押し切って店內の大改修
をやつたりしたので、會社側では
去月二十日表を以て封印強制執行
をし、兩方から弁護士が立會つて
今月はじめに明け渡す事定まつ
た、同店女給二十名はマダム深川
正子を店主にして、玄關が閉され
ても裏口は開いてゐるとばかりに
立ち上り、四日は銀座のうちに赤
い氣焔を揚げ、店前の大ガラスに

は、堂々と「封印された酒場——
我等の生命線を守れ」と張りだ
して、雨の銀座に悲しきバーの不
況を暴露してゐる

（『東京朝日新聞』昭和7年10月5日〔夕刊〕2）

●「ユニオン」（麹町区〔現在の千代田区〕有楽町）

「ユニオン」は、次のように新聞記事に現れている。



ロシア歸りの

二美人に

野口雨情氏が應援して
丸の内にカフェー開業

丸の内有楽町駅南口二階に出来たカフェー「ユニ
オンの女主人公杉崎マサさんは五六年前、高橋
ペトログロフに永く住んでゐた。彼でロシアの氣
分をよく養ひ込んでゐるのんびりした所をよく出
して居心地のよいのなを板にしよう。伸んびりさ
つても衣類に困るふざけなど、助言を求めて行
きたい。その女主人公の姿が、たゞ色の代つた
此のカフェーが一日に賑を興けるといふ引きれの

文句は童謡作家の野口雨情氏が顔を捻つて作り上
げたのだ。こいふ「マサ」が、こゝろ初夏の氣分にお
れ下さい。目比谷においで。のせつは、おより下さい。
コーヒー一杯にも、紅茶一杯にも、弊店の特色が、何處
います。こゝれも引れには、珍らしい、ありきたりの型
か、破つてゐる女主人公は、ロシアに居た時、分枝行用
二葉を、氏を知つてゐた。こいふ其の、話による。こゝ
草氏は、夜の長い、冬のロシアです。つかり、御覧、お
なつて、つたのだ。こゝ、愛が、洋装なん、てい、かにも、生
意、越のやうです。が、此方が、御覧、によい、から、です。こ
こ、成る、我輩の、女給さん、は、日本、服に、エ、ア、ロン、姿、に、が、女
主人公、ま、日本、名、校、練、江、子、バ、レ、ット、さん、は、洋、装、だ
此の、バ、レ、ット、さん、に、隔、三日、甲、に、氏、同、行、家、後、藤、島
吉、氏、の、飛行機、に、同、乗、して、雨、情、氏、の、巻、いた、引、れ、な、何
處、校、が、初夏の、空、から、飛、く、さう、だ、一、篇、お、預、け、に、集、つ
て、居、る、のが、女主人、ま、さ、子、さん、後、ろ、が、バ、レ、ット、校、給
瀬、江、さん、昨日、同、店、で、撮影、

(『讀賣新聞』大正11年5月31日[朝刊]5)

当時の野口雨情は、上記の記事にも見られる通り、童謡作家（ばかりでなく民謡作家）として名を馳せていた。前後に『童謡の作り方』（交蘭社、大正11年3月）と『童謡と児童の教育』（イデア書院、大正11年12月）を出版している。カフェーに対する雨情の関心は、『後姿』（『小説倶楽部』大正10年10月）・『黒のソフトさん』（『かなりや』大正10年12月）・『すさみ心』（『かなりや』大正11年3月）・『銀座へ』（『日本詩集一九二三版』[新潮社、大正12年]）・『薄水色』（『極楽とんぼ』[黒潮社、大正13年]）に見られる（『定本 野口雨情』第1巻[未来社、1985年]99、148-49、153、165-66、第2巻[1986年]189）が、特にロシア系のカフェーを応援した背景には、青年期から抱き続けていた社会主義への関心と共鳴があったものと見

られる。

「ユニオン」は、文芸関係では、次のように秋田雨雀の日記に現れている。

[大正11年11月19日] ひさしぶりで日比谷を歩いた。六時からユニオン・カフェでコスモ倶楽部があった。支那、朝鮮、台湾の学生、日本人らで三十人。支那、朝鮮、台湾の学生の熱烈な談話があった。

[大正11年12月24日] 有島[武郎]、足助[素一]の二君とカフェ・ユニオンにゆき、ロシアにいた主婦[杉崎マサ(まさ子)]とあった。長谷川二葉亭を知っていた。十年余ペトログラードにいたそうだ。美しい女性だ。[中略]

([中略]カフェ・ユニオンのクリスマス)(尾崎宏次編『秋田雨雀日記』第1巻[未来社、1965年]299、301)

雨雀は“この年仙台、金沢、新潟、名古屋等へ講演旅行をしている”が、“これらの旅行ではいつでも有島武郎といっしょ”(『雨雀自傳』91)だった。

●「レーニン」(銀座5丁目)

「レーニン」は、文芸関係では、次のように永井荷風の小説「つゆのあとさき」に現れている。

建物を出ると、おもては五月はじめの晴れ渡った日かげに、日比谷公園から堀端一帯の青葉が一層色あざやかに輝き、電車を待つ人だまりの中から流行の衣裳の翻へるのが目に立つて見える。腕時計に時間を見ながら、君江はガードの下を通りぬけて、敷寄屋橋のたもとへ来かゝると、朝日新聞社を始め、をちこちの高い屋根の上から廣告の軽気球があがつてゐるので、立留る気もなく立留つて空を見上げた時、後から君江さんと呼びながら馳け寄る草履の音。誰かと振返れば去年池の端のサロンラックで一緒に働いてゐた松子といふ年は二十一の女で。その時分にくらべると着物も姿も姿もずつと好くなつてゐる。君江は同じ経験からすぐに察して、

「松子さん。あなたも銀座。」

「えゝ。いゝえ。」と松子は曖昧な返事をして、「去年の暮、暫くアルプスにゐたのよ。それから遊んでゐたの。だけれど又どこかへ出たいと思つて實はこれから五丁目のレーニンついでに酒場。君江さんも御存じでせう。あの時分ラックにゐた豊子さんが居るから、鳥渡様子を見て来やうと思つてゐるの。」(『荷風全集』第8巻[岩波書店、1963年]232-33)

●「レニングラウド」

「レニングラウド」は、文芸関係では、次のように室生犀星の日記に現れている。

[昭和4年5月2日] 「中央公論」に隨筆三十九枚をとどける。二百三十八圖落手。帰途邦楽座に行き、出でて赤鬼にて酒をのみ、カフェ・レニングラウドに行く。(『室生犀星全集』別巻1:102)

- 「ロシア」(銀座三十間堀3丁目1番地[現在の銀座6丁目14番地付近])
「ロシア」は、次のように新聞記事に現れている。

●ロシア屋開業 戦亂の爲休業中な
りし京橋三十間堀三の一ロシア屋は
再び營業を開始すると同時に一部に
カフェを開き廿五日より開始する由

(『東京朝日新聞』大正8年1月25日[朝刊]7)

●カフェ・ロシアの開張 洋酒家
江永氏の令弟江崎君のロシア屋では
開張三ヶ年記念を兼ね、チオシカ、
カルパスなどの酒を本座から取寄せ
ごころまでもロシア気分を充溢させ
たい、さうやかなカフェを、京橋三十
間堀、白牡丹前の店内に新設した。

(『讀賣新聞』大正8年1月30日[朝刊]6)

当時の『東京朝日新聞』には次のような広告が現れている。

<p>カフェ・ロシアの クリスマス 電銀三三六</p>	<p>赤い黒いロシアの酒や 珍らしい食品が澤山揃いました カフェロシア 銀座三十四間堀 電銀二〇三六</p>	<p>夏は涼しい丸太造りの 銀座三十四間堀 カフェロシア 電銀二〇三六番 二、一四八番</p>	<p>丸太造りの銀座世間屋 カフェロシア 銀座三十四間堀 電銀二〇三六番 二、一四八番</p>	<p>丸太造りの 銀座三十四間堀 カフェロシア 電銀二〇三六番 二、一四八番</p>
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)

- (1) 大正9年12月18日〔朝刊〕11。
- (2) 大正10年2月3日〔夕刊〕3、大正10年2月6日〔夕刊〕2。
- (3) 大正10年5月17日〔夕刊〕3、大正10年5月31日〔朝刊〕7。
- (4) 大正10年6月2日〔夕刊〕1。
- (5) 大正10年8月31日〔朝刊〕7。

関東大震災後の模様は、次のように新聞記事に現れている。

黒田清輝子を
 曳き出して、
 カフェーロシヤ
 が小品展を開く
 銀座三十間堀に新築のカフェー
 ロシヤでは来る三月から七日ま
 で黒田清輝子、岡田三郎、山本
 朝、満谷四郎、中瀬弘光、小
 柴錦侍、江永、牧野中雄、外
 の作品を集めて小品展を開
 き大いに銀座の復興の気分を添
 へることとなつたが黒田子の出
 品は数年来にない事とて大さう
 珍らしがられてゐる向は陳列作
 品は入札で賣る由

（讀賣新聞）大正12年11月2日〔朝刊〕4

「ロシヤ」にいた女給の珍しい写真が、次のように新聞記事に見られる。



カ
フ
エ
ー
ロ
シ
ヤ
に
自
殺
騒
ぎ
コ
ツ
ク
猫
吞
み

銀座のカフェーロシアの
中野正平は二十一日夜八時
で紅茶に酔って猫イタズを
隠してゐた、家人が隠して
全座で手紙をしたので生命
を失はぬのは母が探偵なの
に金が

（『讀賣新聞』昭和2年5月23日〔夕刊〕11）

「ロシア」は、文芸関係では、次のように安成二郎・辻潤・内田百間の文章に現れており、また詩人協会の準備会でも利用されている。

安成二郎「バラツクからバラツクへ」

さて銀座である。バラツクの出来たのはライオン、カフェーロシア、ここへ私は、大杉栄が鎌倉にゐる時分、その鎌倉も大杉も今は無くなつたが、久しぶりで銀座で出會つて一緒に晩飯を食ひに行つたことを思ひ出す。カフェー・ロシアは焼けてもバラツクが出来た。（『中央公論』大正12年11月「説苑」欄142）

辻潤「どりんく・ごうらうんど」

ロシア美人と云ふと僕は震災前銀座のカフェー ロシヤにみたリヨウリヤさんのことを思ひ出す。彼女はさして美人と云ふわけではなかつたが、教養があり、愛嬌があつて、歌もよく唱つた。日本で聴いた中では「天然の美」のメロディが一番好きだなどとセンチメンタルなことを云つてゐたのもよかつた。プウシユキンやレルモントフなどをよく讀んでゐたツけ、米国の工業学校へ入る為めに英語をしきりに勉強してゐた——英語は日本へ来てから始めたらしいが、デキにディケンスなどを讀むやうになつたらしい——しかも、自分ではエンジニアになるのだと云つてゐたから感心だ。日本のウエイトレスにもリヨウリヤさんのやうな人が早くドシ〜と出て来ると面白いと思ふ。（『絶望の書』184-85）

内田百間「晝はひねもす」

「僕は須井先生の講義に出た事もなく、語學の教室で出席を取られた事もないのですが、須井先生に初めてお目に掛かつたのは、大正の終りか昭和の初め頃です。その頃は僕も若かつたので或る晩銀座をほつつき、露西亞料理の店へ這

入つたところが、一杯飲んである僕の所へ向うの薄暗い隅にゐた人が席を移し、何だかお互にしやべつてゐる内に面白くなりまして、それが今よりは三十四年お若かつた須井先生なのですが、銀座から長驅して駒込の待合へ行きました。それから飲み直し、夜もすがら飲み續けて、外が明かるくなつてから帰つて来ました。その時須井先生は僕のステツキを突いて帰られました。僕の大事なステツキなので、二三日後にお宅へお邪魔してそのステツキを戴いて来ました。お宅がどの辺の見當だつたか、今考へても思ひ出せません。お宅へ伺つたのはその時一ぺんきりです。須井先生に就いて話せと云はれましたからお話ししましたが、以上申し上げた事は数年前東中野の日本閣で須井先生の古稀のお祝があつた時、矢張り指名されて申し上げた事と全く同じで寸分違ひません。これから後、喜ノ字のお祝、米壽の賀のお祝等が目出度く開かれる事と思ひますが、その節は僕も亦目出度く末席に列なりたいと思ひます。その時今晚の様に、肝煎りの幹事さんが僕に何か云へと云はれましたら、矢張り銀座の露西亞料理から須井先生を拉した同じ話を申し述べるつもりです。只今この席で豫告いたします

宴が終つて席を起つ時、須井さんにあの露西亞料理の店の名を僕は覚えてゐないのですが、御記憶がありますかと聞いたら、言下に「カフェロシア」と答へた。（『東海道刈谷驛』[新潮社、1960年]；『内田百閒全集』第8巻[講談社、1972年]403-04）※須井とは、独文学者・随筆家の吹田順助（1883-1963）のこと。これは吹田の自叙伝『旅人の夜の歌』（講談社、1959年）出版記念会で百閒が行なつたテーブルスピーチである。

詩人協会

昭和3年1月18日に第2回総会準備会が開催され、萩原朔太郎（会則起草委員・評議委員・常務委員）らが出席している（伊藤信吉・佐藤房儀「萩原朔太郎年譜」『萩原朔太郎全集』第15巻[筑摩書房、1978年]403）。※この後、1月21日の第1回総会で詩人協会が成立。

●「ロシア」（京橋区瀧山町「朝日新聞社」裏手の大通り

[現在の銀座6丁目6番地付近]

バア「ロシア」は、文芸関係では、次のように松崎天民・谷崎潤一郎の文章に現れている。

松崎天民「カフェーの女」

カフェーの女にも、憂き煩ひは「生活」と云ふ問題である。それでも日本のカフェーには、貞操を賣物にすることを、表看板にして居る様な女は、未だ一人も見えないけれど、欧州交戦の諸国には、カフェーの女——即——賣春婦が澤山あると云ふ。現に近頃、京橋区の東京朝日新聞裏手の大通に、新に開店し

たロシヤ、バーには、金髪の若い女が三人居て、頻りに醜業を営んで居るとの噂がある。一本のエビスビールも、一杯のベルモットも、其処のバーでは五十銭を食するさうである。同時に三人の異国人は、三圓乃至五圓の紙幣に依つて、人々の枕席にも持すると云ふ。珍し物好きの日本人の中には、一杯の酒機嫌に浮れて、此異国の「淪落の女」を弄んで居る者も尠からずあらう。生れた国の白夜の巷を彷徨^{さまよ}うた末は、憂きに流れて日本の都にまで漂泊して居る彼等三人の運命を思ふと、人を馬鹿にした様な秋波や微笑や、事も無気なる挙動^{なげ}の中にも、人知れぬ涙が流れて居やう。

握手されるさへ、罪深いことの様に思つて、顔紅らめる、日本のカフェーの女は、たとへそれが表向だけとは云へ、未だゝ異国人よりは幸福である。恋も無くて、たゞ金を得やうがためにのみ、貞操を賣物にしようとするには、日本のカフェーの女は餘りに道徳的である。但しそれも何時まで續くことやら、此の後、五年と経ち十年と過ぐる間には、ロシヤ、バーの様になつて行くのではあるまいか。「カフェーの女」は、その職業的にも、道徳的にも、今や寒心すべき危機に立つて居るのである。〔『恋と名と金と』[弘学館、大正4年]176-77〕

谷崎潤一郎「獨探」

その頃露西亞生れの魔性の女が、銀座の裏通りに怪しげなバアを開いたと云ふ事を新聞で知つた私は、俄かに激しい好奇心に捕はれた。丁度私はある創作の原稿を書き上げるために、訪客を避けて埼玉の知人の家に閉居して居た最中であつたが、其処で新聞を讀むと同時に何だか物に憑かれた如く筆を捨てゝ東京に馳せ帰つた。さうして戻つて来た明るく日の晩に、友人の浅川と村山とを唆かして早速バアへ出かけて行つた。

“Russian Bar”と英語で記した丸行燈の看板の下をくゞつて中に這入ると其処は廊下になつて居た。左側の部屋からドシンと強くドアを開けて荒々しい足どりで現はれたのは、非常に太つた怪物のやうな四十恰好の婦人であつた。獅子鼻の口の大きい、団栗眼の猛悪な顔に変な作り笑ひを浮べて、われゝ三人を右側の一室へ押し込むが如く引き擦り込んだ。彼の女の後から、彼の女よりは美しく若さうな二人の女が直ぐに續いてぞろぞろと闖入して来た。「ハヴ、ユウ、エニイ、ドリンク？」と一番背の高いのが威勢のいい聲で云つた。やがて彼等はてんでに洋酒の杯を捧げて、狭い室内の大きなソファに腰かけて居るわれゝ三人の膝を目がけて、一斉に猿のやうに跳び上つた。彼等の一人はいきなり私を膝の上へ乗り倒して、裸體の腕を首筋へ絡み着けたまゝ執拗に酒と色とを押し賣りす可く、肉感的な嬌態を演じて見せた。

「おいもう帰らうぢやないか。なんだ馬鹿々々しい。僕は不愉快でたまらなくなつた。」

浅川が大きな聲で、夢中になつて戯れて居る私の様子を苦々しさうに眺めて云つた。日本語を解せぬ女たちは怪訝な顔をして嘲けるやうに浅川の姿を眺め

た。野蛮な露骨な、偽るところなく羞づるところなき女たちの挑発的な攻撃を避けて、室の片隅に憤然として立ち竦んだ浅川の瞳の奥には、不思議な異国の情調に対し圧迫された恐怖の色が、充ち溢れて居た。柳橋や新橋辺の茶座敷に、人形のやうな女を相手に遊び馴れて居る彼としては、尤もなことだと私は思った。私は彼の狼狽した上品ぶつた態度の中に、「獣」に対する「人間」のつまらなさを認めることが出来た。人間——殊に日本人の小さな不正直が、彼の動作に具體化されて居るやうに感じた。

二人の友人は口を揃へて私の酔興を攻撃した。さうして、二十分ばかりの後、私は友人に促されて不承無精にソオファを立ち上つた。

「勘定はいくらだ」と聞くと、彼等の一人が指を三本出して、「トゥリイ、エン」と答へた。ビールでも葡萄酒でも一杯が五十錢づゝと云ふ計算になつて居た。「どうせ日本なんぞへ流れて来る西洋人は知れたものさ。本場の女はあんな者ぢやないだらう。僕はもう眞平だよ。あれが面白いのは君ぐらゐなものだらう。」

門を出ると村山はかう云つた。「あんな女を相手にして洋行した気分になつて居れば安直でいゝさ。」と浅川も云つた。それでも私はあの女たちの奇怪な戯れを忘れることが出来なかつた。自分の膝の上で暴れ廻つた偉大な臀、首つたまへかじり着いた強い腕力、鳥の嘴のやうに細々とした精悍な両脛、傲岸にして voluptuous な胸部の筋肉の表情——凡べてのものが私の頭を一種の“spell”の下に囚へた。

その明くる晩、日の暮れ切らぬうちから私はひとりで出掛けて行つた。三人のうちで、一番美しさに見える女が私を二階の寢室へ連れて行つた。彼の女は露西亜語の外には何処の国の言葉をも知らないらしかつた。たゞ、私が手眞似や身振りでいろいろの業を注文すると、その度毎に手を出して、“Money! money!!”とせびりついた。前夜階下の Private room で戯れた折の、執拗な媚び諂ひや愛嬌は、寢室へ這入ると同時に彼の女の態度から消え失せて、私は全く無情な冷淡な取扱ひを受けた。「相手が日本人ではとても親身になれない。欺かして金を搾り取つてやるだけだ。」と云ふやうな軽侮の情が、彼の女のぐつたりとした慵げな身體の全部に、表れて居るかの如く感ぜられた。

「あそこへG氏を連れて行つて見てやらう。さうしたらあの女たちは、どんな風に待遇をするだらう。」——私はふとこんな好奇心を起して、又或る晩の九時頃に友人の林を語らつて、二人で神保町のビュウロオからG氏を誘ひ出した。

「行きがけに何処かで一杯引つかけて行かう。酔つ拂つて居ないと気乗りがしないから。」

林がかう云つて、銀座のカフェエ、パウリスタへ立ち寄ることになつたが、酒嫌ひのG氏は一向杯を手にしなかつた。

「おい、おい、Gにウンと酒を飲ませろよ。一つ此奴を酔つ拂はしてやらうぢやないか。」

林は小ひさな聲で私に耳打ちをした。G氏は青い眼をして済まし返つて居たが、やがて其れに感付いたのか、

「林さん、それはいけません。私酒は澤山です。」

と笑ひながら両手を振った。「……一體あなた方は、どうしてそんなに西洋の女がいゝのですか。何処がいゝと思ひますか。それはみんなイルジオンです。私日本の女の方がやさしくて親切で大変いゝと思ひます。日本の女は美しくはありません。しかし女らしい女です。私はいろゝの人種の女と関係しました。私の云ふことはたしかですから、どうぞ信用して下さい。」

彼は物を頼むやうな調子で、熱心に意見を述べた。それで今夜の冒険に対しても、あまり興味を持たないらしい様子であつた。「ロシア人の女と遊ぶのも経験の爲めに一遍はいゝでせう。だが一遍でおよしなさい。今夜だけでお止しなさい。私はほんとに忠告します。」

パウリスタを出てからも、頻りにこんな事を云ひながら、彼は迷惑さうに二人の後へ附いて来た。

私は先へ立つて、つかつかと案内を知つたバアの扉を押し開けて廊下へ這入つて行つた。

「オオ！ ユウロオピアン！」と異口同音に嬉しげに叫ぶ頓興な聲が左側の室内に起つたかと思ふと、三人の女が忽ちばたばたと其処へ走り寄つてG氏を取りかこんだ。さうして、さも待ちこがれて居た恋人にでも逢つたかのやうに、「オ、ユウロオピアン！ユウロオピアン！」を繰り返して、彼の手を引き襟を捕へて例のPrivate roomへ連れ込もうとする。G氏は急に機嫌がよくなつてしまつた。二た言三言如才のない挨拶を交はしながら、彼等のなすがまゝに導かれて行つた。林と私は忙然として彼の後に従つた。

二人はしまひまで傍観者の位地に立たせられた。酒を飲まぬと云つたG氏は其の室内で大分杯の数を重ねた。遂には眞赤に酔つ拂つて、彼等の一人に頬を擦り寄せながら、濁聲高く譯のわからぬ歌をうたひ出した。それから語学の一
番出来るらしい太つちよの女を相手に、平易な獨逸語で維納の町景色などを面白さうに説明した。私は何か外国の小説の舒景文でも讀むやうな心地でその説明に耳を傾けた。相手の女は解るふりをして聞き惚れて居たが、その實一向解らないやうであつた。

「奴さんばかり持てゝ居て、われわれの方は甚だ面白くないな。そろゝ二階の寢室へ押し上るとしようぢやないか。」

林が私の臀をつつついて相談を持ちかけたが、私は妙に気おくれがして心が弾まなかつた。G氏もそれには不賛成であつた。「つまらないからお止めなさい。もうこれだけで結構です。こんな野蛮な獣といつまでもふざけて居るのは馬鹿々々しいではありませんか。」勝手に散々ふざけ抜いた揚句、G氏はこんな事を云つた。結局高い勘定を林がひとりで支拂つて、三人は十二時近くにそこを遁れ出た。

帰り途に、G氏は再び懇々と私のイルジオンを説破しようと努めた。「西洋の女が日本の女より優れて居ると思つたら非常な間違ひです。殊に露西亞の女は、みんなあの通りの野蛮な無禮な獣ばかりです。あの女たちは多分ガリシア辺の

生れでせう。ガリシアは悪い梅毒の流行する地方ですから、あの女たちと関係するのは危険なことです。」かう云つて口を極めて罵倒した。それから二三日過ぎて私へ寄越した手紙の中に、更に下のやうな文句が認めてあつた。

“.....If you allow me to give you a good advice, don't be 'inchiriesna' [sic] any, [sic] more[,] as it really does not pay. Don't you think that the neat, polite and lovely Japanese nesans are 1000 times better than those uncouth Russian mules?

断つて置くが文中のインチリエズナ (inchiriesna) と云ふ言葉は、その晩われ〜が露西亜人から教はつた形容詞で、curious と云ふ英語を露西亜語で何と云ふかと尋ねたら、女の一人が「インチリエズナ」と答へたのである。“nesans”は「姐さん」と云ふ日本語であらう。彼は屢々日本語をこんな風に英文の中へ交ぜて書いた。“quite enryo naku” など云ふ文句を好んで使つた。『新小説』大正4年11月31-36、校訂には『谷崎潤一郎全集』第3巻[中央公論社、1967年]を参照したが、相違が大部分ある)

パウリスタの箇所は本筋からは外れているが、パウリスタ関連文献としては一興の価値があるため、敢えて省略しないで示した。問題のバアについては、以下のような興味深い逸話がある。

カフェー・パウリスタが浚渫たる時代たしか銀ブラなんて言葉の生れる以前の事だ、谷崎潤一郎氏の「獨探」と云ふ小説に現れるロシア人だかフランス人だかの売笑窟が、加賀町の街に出来たばかりの時だ（そこへ、斯道の猛者たる天活営業部の某氏が探検に出かけ、目のクリ玉の飛び出る勘定に銭足らずで、金春のテケツ[切符売り]に金融を懇願したのは当時有名な話。）(徳川夢声『夢声半代記』現代ユーモア叢書第5編[資文堂書店、昭和4年]155)

結論

各々のカフェーには、(女給も含めて) 特有の情調があつた。それらのカフェーの中で、ロシア革命後の国際情勢を背景にロシア系カフェーを秋田雨雀や辻潤のような社会主義・無政府主義運動関係者が最前線にしていた(安成二郎や大杉栄も利用していた) 事実は、それなりに興味深いものの、ある意味では当然とも言える。それに対して、思想的には対極的な永井荷風や室生犀星(と萩原朔太郎)や谷崎潤一郎までもが立ち寄っていた事実ともなると、実に興味深い。荷風「つゆのあとさき」で“レーニンついでいふ酒場”が言及されている事実、谷崎潤一郎“Russian Bar”が詳述されている事実は注目に値する。片上伸が「オデツサ」の馴染み客だったこと(片上に連れて行かれたことのある尾崎一雄が“魅力”を感じていたものの二度と行かなかったこと)、寺田寅彦が「オデツサ」に偶々立ち寄っていたこと、野

口雨情が「ユニオン」の応援者だったこと（女主人がペトログラード滞在時の二葉亭四迷を知っていたこと）、吹田順助と内田百閒が「ロシア」で初めて出会っていたことなども、知られることの少ない、言わば埋れた史実に近いものと言えよう。

文芸とは別に、ロシア系カフェーで（あるいは関係者に）実際に起きていた興味深い出来事（と言ってもゴシップねた）は、前記の通り、新聞がふんだんに提供してくれている。それこそ銀座カフェー裏面史を構成するものであり、日本近代（文化）史の闇を照らし出すものとも言えよう。